

学校のちよつといい話 ②②

我孫子市立我孫子第二小学校 前校長

鍵山 智子



かけがえのない生徒との出会い

私が教員を始めた時から、今も戒めになっている父の言葉がある。それは、「人様が大切に育てている子どもを預かる仕事に就いたからには、その子どもたちの命を預かっているのだという強い自覚と責任をもって勤めなさい」という言葉だ。昭和初期生まれの父は、十人姉弟であったが、幼くして四人の姉弟を病で亡くした。大学出たての我が子に、「子どもは急に体調を崩すことがある」「一人一人違う」ことを肝に銘じ、「子どもの変

化に気づく目」を持つように伝えられたのだろう。このことは、今も、教師として生きる私の原点である。

以前、黒板を見る目が、少しきつめの中二の生徒に出会った。てっきり国語の授業が苦手なのか、私が嫌われているのかのどちらかだと思いこんでいた。

私の二男が急な病気になる一か月ほど入院した。ある日、帰りの会が終わわり、下校後の教室の整頓をしていると、彼が戸締りの確認を手伝ってくれ「先生、僕も小さいとき入院したんだけど、今はこんなに背も伸びてサッカーができて元気になったから、先生の子どものもきつと元気になるよ」と話しかけてくれた。その時、彼が家でお母さんと自分の幼い時の話をしたこと、他の先生には恥ずかしいから、この話をしたことを絶対に内緒にしてほしいと念を押された。私は、心から「ありがとう」と言っ、部活動に行く彼を見送った。翌日からは授業中での彼をはじめ、子どもたちを見る目が、ガラッ

と変わったことを今も鮮明に覚えていて。

そして、親になって、さまざまな子どもの変化を見ていいると思いきも、肝心の目の前にいる生徒の気持ちに寄り添えていない、一面しか見ていないことに気づき、愕然とした。子どもと向き合う時に先入観を持たず、子どもを多面的に見ることの大切さを改めて実感した。私の教師観を育てるために出会ってくれたかけがえのない生徒だと今も感謝している。

私は、子どもの成長に寄り添いながら、どのようにその成長を促せるか、子どもの持てる力をどのようにしたら、よりよく引き出せるかについて、いつも自身の課題として捉え、自問自答している。授業や学級での様々な活動を通して、子どもたちの「いいところ探し」も続けている。私一人では限られてくるので、子どもたちにも手伝ってもらっている。

そして、もう一つ、二十数年前から「プラス思考」という言葉に出会い、たくさん伝えてきた。生きていく中では、辛いことや苦しいことに出会うことさほうが多いように感じることをさ

えある。だからこそ、楽しいことや嬉しいことに出会った時の喜びの大きさも人一倍味わい深いものかもしれない。私自身の日々の生活を省みると「でも…」や「だって…」と言いつつばかりで、「マイナス思考」で考えることがたくさんあった。しかし、そこからは明るい未来の展望は難しい。そこで、「マイナス」よりも、「プラス」に物事を受けとめる考え方に変えてみた。

何事にも前向きにポジティブに物事を受け止める姿勢づくりは大切だ。例えば、私が出会った多くの生徒は、自身の短所はあげやすいが、長所はなかなか言い出せないでいた。そこで、短所も裏返せば長所になることもあると話し、例えば、「おっちょこちよいい好奇心旺盛」や「ゆっくりタイプ⇕慎重派」、「せっかちタイプ⇕即断実行派」などをあげて、生徒自身の性格や行動もプラスのフィルターをかけてみることを勧めたり、私からもプラスの言葉かけを増やして、日々の生活においても「プラス思考」を取り入れて過ごした。卒業後も「相手のよさ」に気づき、「プラス思考」を取り入れて生活してほしと願っている。